

バスク系羊飼いによるバスク地方と アメリカ合衆国西部間の移住行動

— ナバラ州バスタンの羊飼いの事例 —

石 井 久 生

1. はじめに

バスク地方から海外への移民の歴史は古い。特に大航海時代以降、多くのバスク人が新大陸へ渡った。彼らは、現地のホスト社会と接触する過程で、ホスト社会住民が敬遠する就業分野、あるいは彼ら自身の得意とする就業分野へ進出した。メキシコやアルゼンチンのパン職人（Weis 2012）、オーストラリアのサトウキビ労働者（Douglass 2003, 103）がその典型である。このようにバスク系移民は、特定の地域と特定の就業分野に結び付けられてイメージされるようになった。

アメリカ合衆国においてバスク系移民が注目されるようになるのは、1840年代末のカリフォルニアでのゴールドラッシュと、それに続く西部での鉱山開発以降である^①。その当時のバスク系移民の主たる就業形態は、いうまでもなく鉱山労働者であった。鉱業はほどなく衰退するものの、カリフォルニアでの人口増加による食肉需要の急増と畜産業の隆盛にともない、バスク系住民は牧畜業、特に牧羊業の部門に参入するようになった。それにともない19世紀末から1970年代にかけて、同部門に雇用を求めるバスク系移民が断続的に流入した。移民の断続的流入により労働力が補充され続けることで、牧羊業におけるバスク系移民の知名度は高まった。その結果、アメリカ合衆国西部においてバスク系移民はエスニック・グループとしての確固たる地位を築くと同時に、彼らの就業形態として「羊飼い」がステレオタイプとして語られるようになったのである。

アメリカ合衆国西部におけるバスク系移民とその就業形態としての羊飼いに関する従来の研究の主流は、歴史的資料を駆使しての移民史研究（Bieter and Bieter 2000, Bieter 2005, Douglass 2003, Douglass and Bilbao 1975 など）である。その中でも評価が高いのが Douglass and Bilbao（1975）による *Amerikanuak* である。彼らは、バスク系移民の新大陸への移民が始まる1500年代からそれが収束する1970年代までの歴史的資料を用いて、アメリカ合衆国西部におけるバスク系移民史を詳述している。その中で扱われる新大陸の地理

的範囲は、アメリカ合衆国に限定されずメキシコなどの中部アメリカからアルゼンチンやチリなどの南米大陸にまでおよぶ。そのうえで、1800年代初めに南米に大量に移住したバスク系移民が、再移民としてアメリカ合衆国へ移住して羊飼いに就業する過程を詳細に記述している。そのため新大陸全域におけるバスク系移民史研究としての評価も高い。

このような移民史研究は、バスク系移民史の全体像あるいは個々の事例を明らかにしようとしている。しかし依拠する資料は歴史的文書が多く、定量的資料に乏しいことからくる具体像の説得力不足は否定できない。移民の量的規模を明らかにした研究も存在しないわけではない。例えば Álvarez Gila (2002) は、1855 年のアルゼンチンのセンサスを用い、当時ブエノスアイレスに居住していたバスク系移民の性別、年齢、入国年次、出身地などのデータから、ブエノスアイレスのバスク系コミュニティの実像を明らかにしている。ただしこの事例は、その当時のアルゼンチンセンサスの公表項目が詳細であったことの恩恵によるものであり、最近の統計情報でそこまで把握することは難しい。現在の国勢調査を例にとると、スペインやフランスのセンサスあるいは人口動態調査では、排出地と受入地の国家間関係までは読み取ることができるうえ、排出地における移民の属性はかなり詳細に把握できるものの、受入地の情報は極めて限定される。国家間を移動する移民の研究の場合、そのような情報の偏りが致命的となる。アメリカ合衆国の場合、1980 年センサスから出自の項目に「バスク」⁽²⁾が登場するようになり、それ以降バスク系移民の分布の詳細を把握可能である（図 1）。しかし、移民がピークを越え急減する 1970 年代以前のセンサスでは当該項目が存在し

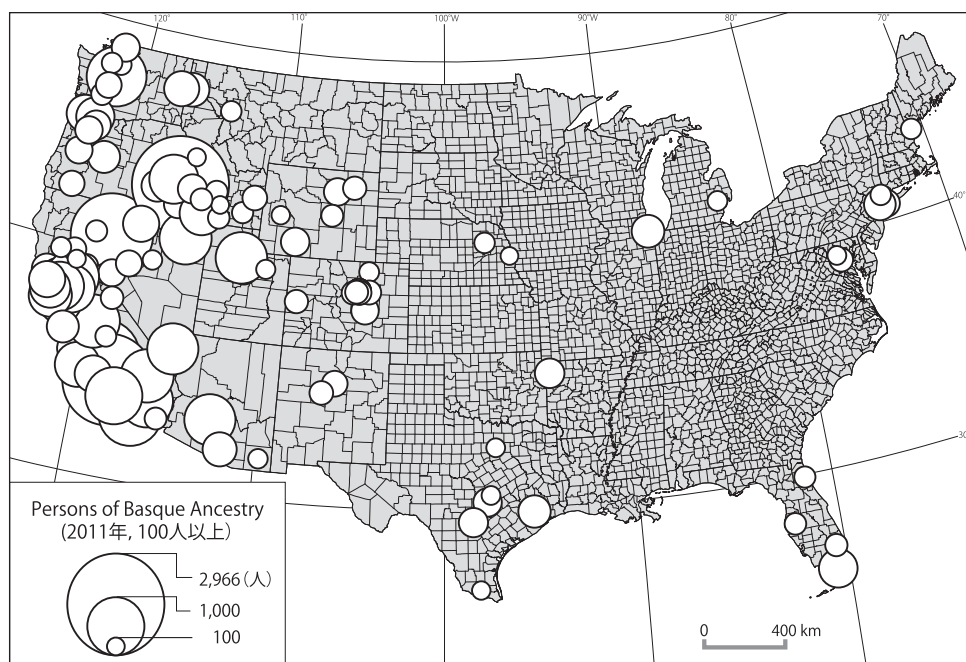


図 1 アメリカ合衆国における郡別バスク人（2011 年）

出典：American Community Survey 5-year estimates による。

ないため、移民全盛時の状況把握は不可能である。いずれにしても、国家統計は調査実施主体が帰属する国家の管理下にあるため、当該国の状況は詳細に把握可能でも、管轄外の地域の情報は粗末であり、国家間の移民の実態を把握するための資料として限界がある。

アンケート調査でもこの種の問題が常に付きまとう。Oiazabal (2009) は、サンフランシスコとその周辺に存在するバスク系移民の民族組織であるバスククラブやバスクセンターにおいてアンケート調査を実施し、組織構成の詳細を調べることで移民像に迫っている。その調査から、民族組織構成員の多くが移民1世と2世であること、移民1世の場合、出身地がスペインバスク地方のナバラ県、フランスバスク地方の低ナバラであることが明らかになっている。事実、バスク系移民の歴史は1850年代にさかのぼるものの、1950年代から1960年代半ばには一定規模の移民が継続的に供給されたため、比較的新しい移民が多い。アンケート結果はそのような最近の移住行動を裏付けている。同様に移民の出生地であるが、カリフォルニア州からネヴァダ州にかけては、スペインバスク地方のナバラ州 Navarra (図3参照) やフランスバスク地方 Iparralde (図3参照) の移民が多く流入した地域である⁽³⁾。それとは対照的に北部のアイダホ州やワイオミング州では、スペインバスク地方のビスカヤ県 Bizkaia (図3参照) からの移民が卓越するといわれている。バスク系移民は、日系移民のように国家や道府県が組織化した官主導型の移民ではなく、個人的な地縁や血縁を頼りに移住した連鎖移民 chain migration であったと多くの研究者が指摘している。Oiazabal (2009) の調査結果からも、送出地と受入地の地理的リンクがうかがえ、地縁がバスク系移民の移住行動に強く作用していた実態が理解できる。ただし、Oiazabal (2009) が明らかにしたのは、アメリカ合衆国内に定住した移民の属性である。実はバスク系移民の多くは、アメリカ合衆国西部に移住後、一定期間にある程度の蓄財を達成した後に出生地へと戻るといような移住行動をとった者が多かった。そのような「還流的移民 return migrants」の実態まで Oiazabal (2009) の研究はカバーしていない。

Miller (2013, 222-3) は、アメリカ合衆国へ移住したバスク系移民の帰国率が極めて高い点を指摘している。それは彼らの目的が出稼ぎにあったからである。出稼ぎ移民のような還流的移民を含めバスク系移民の実態を把握するには、どのような方法が考えられるであろうか。センサスや歴史的ドキュメントなどの既存資料から実態に迫ることはほぼ不可能である。入国管理局の出入国記録からは2国間の移動の把握は可能であろうが、2つの異なる体制間でのデータの照合が必要になり、膨大な手間を要するであろう。個人的ドキュメントに頼るという方法もあり、この手法を用いて個人の還流的移民行動の実態を明らかにした先行研究は存在する (Arburua Goyeneche 2005 など)。しかし、個人的ドキュメントにより把握可能なのはあくまでも個人の移民像であり、バスク系移民の具体像の一端にすぎない。バスク系羊飼いの還流的移民の集団行動を明らかにするには、ある程度の規模のアンケートを実施してデータを収集する以外の方法はなさそうである。

2. アメリカ合衆国西部におけるバスク系羊飼い

具体的分析に入る前に、従来の研究から明らかになっているバスク系羊飼い移民史を概観しよう。

アメリカ合衆国へのバスク系移民の歴史は、1840年代末の南カリフォルニアでのゴールドラッシュまでさかのぼる。その当時、ヨーロッパからの直接移民も存在したが、その数はわずかで、大半を占めたのはアルゼンチンやチリへ移住した後にアメリカ合衆国へ入国した再移民であった。そもそも19世紀前半、アルゼンチン、ウルグアイなど、コノ・スール Cono Sur と呼ばれるラテンアメリカ南部温帯地域へ、大量のバスク系移民が牧牛業や牧羊業に職を求めて移住した (Alvares Gila 2002, 140-1)。

新大陸におけるバスク人の入植地は、16～17世紀にはメキシコ北部や中央アンデスの鉱山地帯、18世紀にはベネズエラやチリが主流であった。19世紀に入りラプラタ川流域で牧畜業が発展すると、それに就業機会を求めるバスク人がそこに大量に移住するようになった。その当時ラプラタ川流域のパンパ地域における牧牛業や牧羊業の発展が目覚ましかったというブル要因があるものの、バスク地方内在のプッシュ要因も存在した。当時、衛生環境の向上によりバスク地方では死亡率が大幅に低下し人口が急増した。増加した人口を維持するには大量の食糧が必要になるが、19世紀前半は気候の寒冷化による食糧不足が深刻で、食糧不足の解決策のひとつとして移民が選択された。人口学的要因とともに、家族制度も移民を推進する要因となった。バスク地方は伝統的に牧畜社会であったため、家族経済を維持するには一定規模の土地所有が前提となり、そのため家族の土地は細分化防止のために伝統的に長子が相続することになっていた。そのため長子以外の子供にとって移民は就業選択上の重要な選択肢となった。政治的事件も移民排出要因となった。19世紀前半のスペインは動乱が続く、バスク地方はスペイン独立戦争 (1808-1812)、第一次カルリスタ戦争 (1833-1839) の主戦場の一つとなり、戦乱による地域の荒廃も移民排出の重要な要因となった。またカルリスタ戦争でバスク地方はカルリスタ側を支持したため、中世以来維持されてきたフエロスと呼ばれる地方特権が徐々に縮小され、バスク固有の徴税権や軍隊制度が廃止される中で、それまでは免除されていたスペインの徴兵制度に組み込まれるようになったことも、移民を促す要因となった。

そもそも19世紀前半にラプラタ川流域にバスク系移民が入植した理由は、当時その地域で牛や馬の牧畜業が盛んになり労働者が不足したこと、さらに毛織物産業が発達したにもかかわらず現地では牧羊の技術が欠如したことにあるとされる (Azcona Pastor and Douglass 2004, 276-7)。特に1840年代は多くのバスク系移民が牧羊業に参入し、彼らは広大な草原地帯パンパにおいて羊の長距離移牧を実践した (Azcona Pastor and Douglass 2004, 277)。その後1840年代後半に始まった南カリフォルニアでのゴールドラッシュにより、バスク系

の移住経路は大きく変化し、19世紀半ばにはカリフォルニアにラプラタ川流域からの再移民とヨーロッパからの直接移民が流入するようになった。しかし多くのバスク系移民はゴールドラッシュの成功とは無縁であり、鉱業を離れ牧羊業に参入するバスク系移民が登場した。ちょうど1850年代から1860年代にかけて、南カリフォルニアでは牧羊業が発展した。当初は牧牛も行われていたが、カリフォルニアの乾燥した気候に対応しきれず次第に衰退した。それに代わり乾燥した気候と起伏の激しい地形に対応可能な牧羊業は、食肉加工業や毛織物業の発展と並行して、カリフォルニアの重要産業に成長した。そこにバスク系移民が参入するわけであるが、それがスムーズに進行したのはラプラタ川流域での牧羊業の経験があったからである。

南カリフォルニアの牧羊業において、バスク系移民は1850年代にはすでに重要な地位にあった。バスク系羊飼いは、乾燥した南カリフォルニアの自然環境に適応した季節的な長距離移牧様式をすでにこの時期に確立していた。当時の彼らの移牧は、セントラルバレー Central Valley (図2) を中心に展開された。彼らは冬季、セントラルバレー南部のサンホアキンバレー San Joaquin Valley において土地を賃貸あるいは購入し、そこで羊を飼育した。ちょうど冬の終わりから春にかけては、羊の出産期にあたるため、長距離移牧には向かない。そのため羊飼いはこの時期サンホアキンバレー付近に留まった。そして夏季には大き

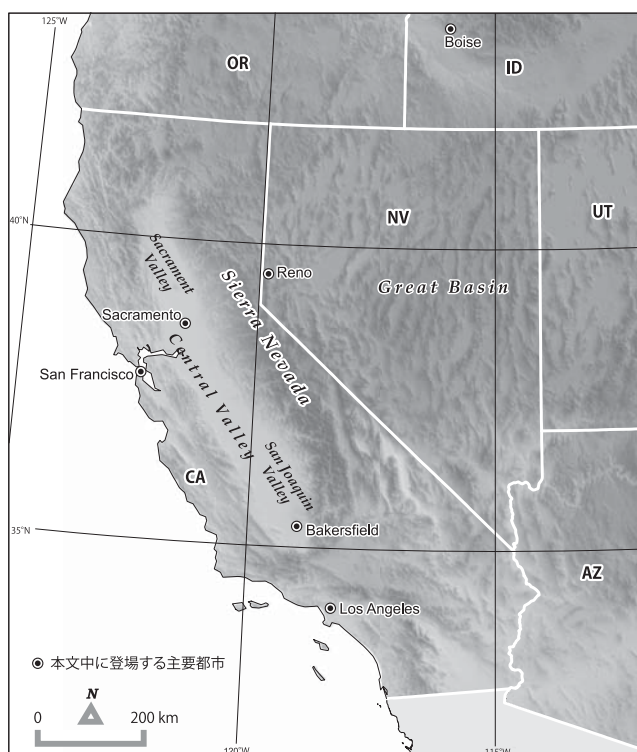


図2 アメリカ合衆国西部の概要

*本文中に登場する都市名、地形名のみを表記した。州名は略号とした。

くなった羊の群れをとめない、シエラネバダ山脈 Sierra Nevada 付近の高地の公有地へ移動した。富を蓄積した彼らの一部は、サンホアキンバレー付近の土地を取得し、羊飼いを雇用するようになった。羊飼いは地縁や血縁により信頼のおけるバスク系を中心に雇用された (Douglass and Bilbao 1975, 299-300)。ただし現地在住のバスク人では数に限界があるため、バスク地方から呼び寄せられるようになった。こうしてアメリカ合衆国西部とバスク地方とを結ぶバスク系の連鎖移民が生じた。バスク系羊飼いへの報酬は、移牧の過程で生まれた子羊があてがわれることが多かった (Douglass and Bilbao 1975, 225-226)。子羊を得たバスク系羊飼いは、3年から4年間移牧に従事することで、十分な羊群を形成した。そして地縁血縁を頼りに移住してくるバスク系移民に子羊を与えることで、新規移民が移牧に容易に参入することを可能にした。こうして連鎖移民ネットワークが漸次補強された。

セントラルバレーを中心に展開されたバスク系羊飼いによる移牧は、1860年代には過密状態となった。そのため彼らは、1870年代にはシエラネバダ山脈を越えたネヴァダ州、アリゾナ州へ、さらに1870年代後半にはネヴァダ州北部、オレゴン州南東部、アイダホ州南部にかけて広がる広大なグレートベースン Great Basin (図2参照)に進出するようになった。ちょうどこの時期、大陸横断鉄道によりグレートベースンが東海岸市場と結ばれたことも、バスク系羊飼いのグレートベースン進出を促進した。

19世紀後半のバスク系移民は、牧場経営に携わる者もあったが、大多数は移牧に従事する羊飼いに就労した。羊飼いの多くが単身男性で、その出身地はスペインバスクのビスカヤ県とナバラ県、フランスバスクの低ナバラ地方の農村地域にほぼ限定された。そもそも羊飼いは過酷な労働であり、そのためこの就業分野で競合する移民集団は少なく、バスク系移民は比較的容易に参入することが可能であった。同時に羊飼いは、英語の能力を必要とせず、過酷ではあるが長距離移動に必要なテントや牧羊犬など必要最低限の装備がそろえば単身でも開始できたため、農村出身の単身男性には参入しやすい就業形態であったといえる。長期間を放牧地で羊の群れと行動し、馬車に張ったテントに寝泊まりするため、彼らは孤独であった。その孤独さゆえに、バスク系移民はアメリカ社会において最も同化しにくい移民集団といわれるようになった。そのため単身でアメリカ合衆国に来た羊飼いの中で現地の女性と結婚して残るものは少なく、大多数は一定段階で羊の群れを売却し、バスク地方に戻り、同郷の女性と結婚した (Douglass 1984, 115)。

1900年代から1910年代にかけて、バスク地方からの移民は順調に増加した。しかし1921年の移民法により移民の出身国別割当て制が導入され、さらに1924年の移民法により割当て基準が厳しくなったことで、バスク地方からの移民は急減した⁽⁴⁾。バスク地方はフランスとスペインにまたがることから、バスク系移民は両国に対する移民割当ての影響を受けたが、特に深刻だったのがスペインに対する割当てであった。1921移民法で年間912人の入国がスペインに割当てられたが、1924年移民法で131人まで厳格化されたことで、スペインバスクからの移民の流れは急速に先細った。フランスに対する移民割当ては厳しくなかったも

の、この当時のフランスバスク地方からの移民はバスク系羊飼いの労働力不足を補完するに十分ではなかったとされる。その理由として Douglass and Bilbao (1975, 303) は、フランスバスク地方からラテンアメリカへの移民が20世紀に入って以降も続いていたこと、南カリフォルニアで20世紀に入ってから発展した酪農業にフランスバスク系羊飼いが参入するようになったこと、これら2点を指摘している。当時の南カリフォルニアでは、人口増加にともない酪農製品の需要が高まり、フランスバスク系羊飼いの中には所有地を牧場に転換し酪農を始めるものがあらわれた。フランスバスク系の牧場所有者は、牧場労働者として近親者を雇用したため、フランスバスク系移民の羊飼いの参入は減少した。さらに第一次大戦開戦以降、フランスバスク地方からの移民の流れはほぼ途絶えた。それに対し、スペインバスク地方のナバラとビスカヤからの移民は、規模は縮小されたとはいえ継続的に流入し、羊飼いの労働力を供給し続けた。この頃からバスク系移民はスペインバスク出身者が大半を占めるようになった。そのため1924年の移民法は、スペインバスク地方からの羊飼いの供給を停滞させる原因となり、後に深刻な羊飼いの不足を招いた。

1920年代から強化された連邦政府による国有地管理の動きも、バスク系羊飼いによる移牧に大きな影響を与えた。特に1934年制定の「テラー放牧法 Taylor Grazing Act」の影響は大きかった。同法の特色は、内務長官に固有放牧地を管轄する広範な権限を付与したことにある。この法律によって、未使用かつ未保留であるが放牧に有益であると判断される国有放牧地に8000万エーカーを限度に放牧地区 grazing district を設置することが認められ、それを利用したり貸与したりするためには連邦政府の放牧許可が必要となった。これにより1億7300万エーカーの土地が連邦政府管轄下の放牧地区に指定された。同法成立の背景には、牧場主と羊飼いの間の放牧地を巡る抗争が存在するとされ、国有地に隣接して牧場を所有する牧場主らは、隣接する公有地でのバスク系羊飼いの活動を制限することで自らの放牧用地を確保しようと試み、地方政府や連邦政府に対して同法成立のための圧力をかけたといわれている (Thrusby 2009, 165-167)。このような国有放牧地の再編は、バスク系羊飼いが確立した長距離移牧ルートを大幅に縮小することに作用した。

バスク系羊飼いに対する逆風はあったものの、第二次大戦期の徴兵による羊飼いの不足と、毛織物の需要増加により、1940年代には羊飼いの不足が深刻化した。これに対してアメリカ合衆国西部諸州は、通称「羊飼いの法 Shepherd Laws」と呼ばれる一連の法律を適用し、不法滞在していたバスク系移民に対し永住権を与えるなどして、羊飼いの不足に対処した (Douglass 1979, 297)。しかしそれだけでは羊飼いの不足は解消できなかったため、カリフォルニア山系組合 California Range Association やカリフォルニア羊毛生産者組合 California Woolgrowers Association などアメリカ合衆国西部を代表する牧羊関連団体が連邦政府や連邦議会議員に圧力をかけたことで、移民国籍法、通称マッカラン＝ウォルター法が1952年に成立した。同法により、熟練羊飼いは特殊技能者として移民割当てから除外されるようになった。同法は対象をバスク系に限定していたわけではないが、同法が適用された

のは主にバスク系であり、これにより約 5500 のバスク系羊飼いが入国したとされる⁽⁵⁾。

こうしてバスク系羊飼いは、1950 年代から 1970 年代前半にかけて安定的に供給されるようになるが、バスク地方の経済環境の改善や政治状況の安定により、1970 年代にはバスク地方からの移民が急速に減少した。それに代わり、ラテンアメリカのペルーやメキシコからの移民が羊飼いに就業するようになった。

総じてバスク系羊飼いの移住行動の特徴は、地縁や血縁をたよりに移住すること、移住先で同化する者は少なく出身地に還流する者が多いことにあった。要するにバスク系羊飼いは、地縁血縁を移住のチャンネルとする連鎖移民であり、出稼ぎの要素が強く蓄財の後にバスク地方に戻る還流的移民であったといえる。このような出稼ぎ移民、還流的移民は、他のヨーロッパ系のエスニック集団にもみられる移住行動であるが、バスク系の場合、職種が極めて限定的であり、しかもその職種が現地のホスト社会との接触をほとんど必要としないものであったがために、就業行動の面で特殊性が際立つ。そうであるなら、アメリカ合衆国で羊飼いに従業した経験のあるバスク地方在住者を焦点に調査を進めれば、バスク系移民の移住行動の実態が解明できそうである。

3. バスク在住の「アメリカに行った羊飼い」amerikanuak

羊飼い経験者の組織化

現在バスク地方には、かつてアメリカ合衆国で羊飼いとして活躍したバスク人が多数在住している。1950 年代から 1970 年代にかけてバスク地方を離れて羊飼いに従業した後に帰郷した人々であるため、現在では高齢である。彼らが現在どこにどの程度在住しているのかを知るための公的な資料は存在しない。彼らの移住行動が、自治体や行政の支援によるのではなく、個人的な血縁や地縁による連鎖移民により推進されたため、行政側はその実態を把握していないのである。

羊飼い経験者らの実態把握の難しさの一因は、彼ら自身の組織化が帰国後に起こらなかったことにある。移住先でエスニック集団として結束しながらも、帰国後に組織化が起こらなかった原因は、帰国後の居住地がバスク地方各地に分散しており、帰郷後は従来の地縁や血縁関係に埋没してしまったことであろう。また彼らが高齢であり社会の第一線を退いて余生を送る身分であるという彼ら自身の置かれた社会的状況も、組織化が進まない原因である。

そうしたなか、彼らの子弟の間で羊飼い経験者を組織化しようとする動きが起こってきた。その背景には、高齢化により経験者自体の数が減少する中で、バスク人がアメリカ合衆国において羊飼いに従業したという記憶自体が薄れつつあることに対する危機感があった。彼らは 21 世紀に入った頃から活動を開始し、2011 年には「アメリカのバスク系羊飼い協会 Euskal Artzainak Ameriketan」を設立するに至った⁽⁶⁾。同協会は、バスク系羊飼いがアメリカ合衆国において活躍した歴史を後世に伝えるための諸活動と、羊飼い経験者を組織化

するための活動を展開している。彼らの活動で特筆すべきは、羊飼いの経験者らを一堂に会する祭典を開催していることである。同祭典は、2006年にスペインバスク地方のナバラ州北部のレサカ Lesaka で開催されて以降、毎年各地で開催されている。

本論で注目したのは、2008年9月21日にスペイン・ナバラ州のバスタン Baztan で開催された祭典である。同祭典で主催者らは、その場を利用して羊飼いの経験者の個人データを収集した。そのデータはデータベース化されたうえ冊子としてまとめられ、Urdanpilleta ら (2008) が出版している⁽⁷⁾。

Urdanpilleta ら (2008) がまとめたデータベースに記載されているのは、総数 175 名の羊飼いの経験者の情報である。全員がバスタン郡 (図3) の出身者である。その具体的内容は、2008年現在の居住集落、生年月日、出国年、受入地、滞在年数などの基礎的データのほかに、現地での経験談も含んでいる。学術的手法に則って採取されたデータではないため、記載情報に完全な一貫性はなく、回答者のなかには項目の一部を回答していない者もある。また、祭典に出席した者が欠席者の情報を回答したであろうと推測される情報も、そのまま記載されている。そのような点からして学術的価値が高いとは言えないが、現在も存命の 100 名を超える羊飼いの移住の実態をここまで明らかにした資料は他に存在せず、その点からしてバスク系羊飼いの移民史の資料として一線級の価値があるといえる。このデータベースは、内容の取捨選択いかんによっては研究資料として十分耐えうるものである。

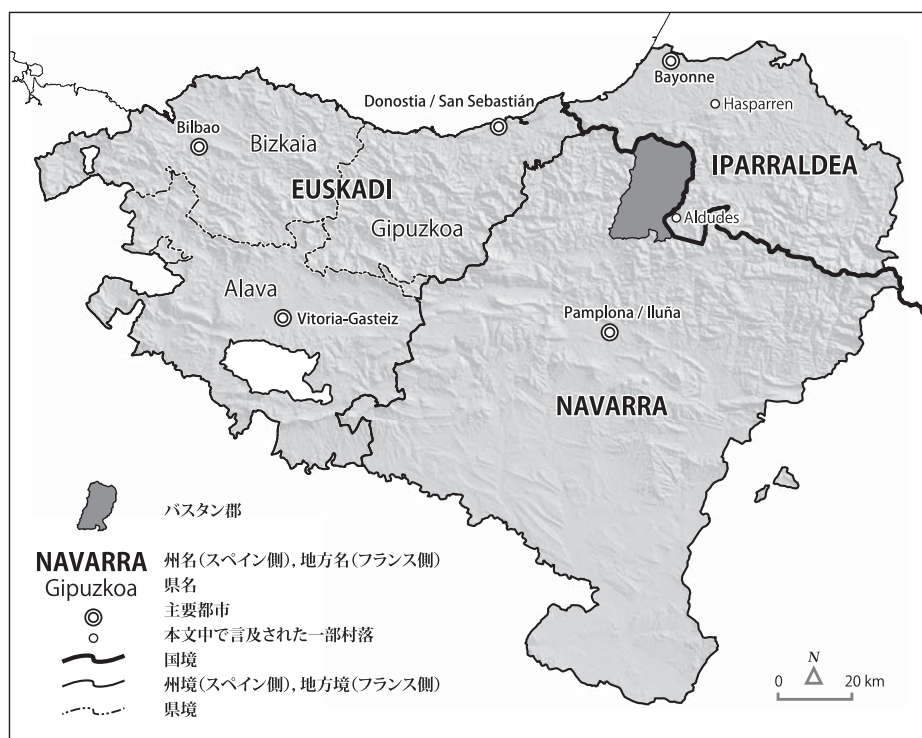


図3 バスク地方とバスタン郡の位置

バスタンと移民

Urdanpilleta ら（2008）がデータベース化した羊飼いの経験者は、全員がバスタン郡の出身者である。バスタン郡は、ナバラ州の北部に位置し、3つの基礎自治体（バスタン、ウルダスビ Urdazubi, スガラムルディ Zugarramurdi）により構成されており、郡の北側と東側はフランス国境と接している（図4）。ピレネー山脈の西端部に位置するが、ピレネー山脈の分水嶺はバスタンの南縁付近を走る。郡を1000メートル級の山々が取り囲み、カンタブリア海にそそぐビダソア Bidasoa 川の支流であるバスタン川が自治体の中央部を流れる。カンタブリア海から入り込む海洋性気団と周囲を囲む山々の影響で、場所によっては年降水量2000 mm 超えるような湿潤な気候となる。そのため森林に覆われ、牧草地の管理も容易であり、牧牛や牧羊が現在でも重要な産業になっている。住民の生活の舞台は、バスタン川とその支流が形成するバスタン河谷である。バスタン河谷を中心に主要集落が分布する。

基礎自治体バastianはバスタン郡の面積の大部分を占める。その面積は373.6 km²で、ナバラ州を構成する272の基礎自治体のなかでも突出して大きい⁽⁸⁾。バスタンの役所はエリソンド村 Elizondo に置かれているが、役所に基礎自治体の長が置かれるほかに、15の主要集落ごとに集落の長が存在する。ナバラ州の基礎自治体は、複数の集落で構成される場合、それぞれの集落に対してconsejo Consejo という行政上の地位を与えるのが通例であるが、バastianのみがその制度を採用していない⁽⁹⁾。立法機関としては、自治体選挙で選出される



図4 バスタン郡概況

議員により構成される地方議会 Udaltzatza が置かれるほかに、15 主要集落の代表者で構成される地方評議会（バスク語で Batzar Nagusia、スペイン語で Junta General del Valle と呼ばれる）が存在する。地方評議会は、バスタンの約 80% を占める共有地を管轄するための機関として、15 世紀半ば以来の歴史を持つ（Ezeizabarrena Sáen 2009, 285）。そもそもバスタンをはじめとするピレネー地域では、河谷沿いに発達した集落の一群が共同体の基礎となり、各共同体では統治のための法体系が築かれた。それはピレネー法（スペイン語で derechos pirenaicos）と総称される。バスタン河谷では「バスタン法 Baztango ordenantza」を定めて共同体を統治したが、その審議機関が地方評議会であった。バスタンの北部に隣接する基礎自治体ウルダスビとスガラムルディは、17 世紀ごろにバスタンから分離されたが、それまではバスタン法の及ぶ範囲にあった。以上の点からしてバスタン河谷は、周囲とは行政上も立法上も独立した共同体であったといえる。

バスタン河谷は、文化的にも独立性が高かった。バスタン河谷を含むナバラ州北部ではバスク語が日常的に使用されるが、中世以来バスク語は筆記言語になった歴史がなく口承で伝えられてきたために、地域による方言の変異が大きく、ナバラ方言のうち、バスタン河谷で用いられるバスク語は単独で「バスタン方言」として分類される場合がある⁽¹⁰⁾。バスタン河谷におけるバスタン方言の独立性は、周辺地域との交流の欠如性と共同体の独立性の反映でもある。

バスタン河谷は、新大陸への移民の排出地としても古くから知られていた。Arizcun Cela (1988) は 1678 年から 1768 年の 90 年間に、バスタン住民の 12~16% に相当する 2100 人が新大陸に移住したと推計している。また Idoate Ezquieta (1989) は、移民が出国時に請負業者などと交わす保証契約同意書、債務証書、旅行契約書などの個人的ドキュメントから当時の移民の具体像を明らかにしているが、カルリスタ戦争で疲弊した 1840 年から 1879 年の 40 年間にバスタンから 928 人が移住したとしている。このようにバスタンは多くの移民を輩出してきたため、現在でも本籍をバスタンに置きながらスペイン国外に在住している住民の割合が高い。Laparra ら (2009, 60) は、ナバラ州の国外移民を調査した報告の中で、基礎自治体別に 2008 年時点の国外在住者を算出している。その中でバスタンは、州都パンプローナの 5790 人に次ぐ 1159 人の国外在住者を擁しており、住民に占める割合は人口千人当たり 145 人（パンプローナが 26 人、州平均が 25 人）と突出して高い。

4. バスタン出身羊飼いの移住行動

本章では、前章で言及した Urdanpilleta ら (2008) に掲載されたバスタン郡在住の羊飼い経験者の情報を利用して、バスク系羊飼いの移住行動の特徴を明らかにする。ただしこのデータベースを利用して論を展開するには、データの精度を後の分析に耐えうる水準にまで上げなければならない。言い換えれば、回答項目の中から本論で必要な項目を厳選し、それ

に回答しているサンプルのみを抽出する作業が必要である。

本論の重要な目的がバスク系羊飼いの移住行動の解明にあることから、このデータベースから抽出する情報は「現住集落」「出生年」「出国年」「滞在年数」「移住先」「父方母方の姓」の5項目に厳選した。これら5項目の情報のうちひとつでも欠如するサンプルは、分析から除外した。また、移住後そのままアメリカ合衆国に在留している羊飼い経験者のサンプルも除外した。祭典には、一時帰国中の在米者も参加していたようであるが、彼らが在米の近親者について回答しているとみられるサンプルもあり、情報が一次的なものなのか二次的なものなのか判断できないため、在米者のサンプルについては一括して削除した。在米のバスク系羊飼いについては、アメリカ合衆国において情報を収集したほうが、質量ともに充実した情報が得られるであろうし、バスタンで開催された祭典で収集された情報で価値があるのはアメリカ合衆国で羊飼いを経験し帰郷した人々についての情報であるので、この取扱は妥当であろう。こうして最終的に121サンプルが残った。

121名の羊飼いの移住行動を集落別に集約し、各サンプルの移住行動を経年的に示したのが図5のグラフである。ここで扱う羊飼い経験者が居住するのは16集落で、基礎自治体バスタンにおいてバスタン評議会に評議員を送る15集落からアニス村 Aniz を除いた14の主要集落と、バスタン郡内の基礎自治体ウルダスビとスガラムルディの2集落である。図中でサンプルを表記する順序は、集落別に出国年の早い順に列挙した。同年に出国している場合は、滞在年の長いケースを上位に記載している。

出生年や出国年から、彼らの移住行動の一端をうかがい知ることができる。サンプルの平均出生年は1942年で、調査当時の2008年の平均年齢は66歳ということになる。最も早い生まれの者で1923年（85歳）、最も遅い者が1967年（41歳）となる。出国年であるが、平均が1964年であり、およそ22歳で出国していることになる。最も早い出国年が1951年で最も遅いのが1985年である。出国時の年齢は、最も若いケースが15歳、最も遅いケースが42歳となっている。滞在期間については、最長が46年で最短が3年、平均が約11年となる。ただし、中央値を計算すると約8年となることから、平均値よりも短期間滞在のケースが多いことがわかる。最短が3年となるのは、当時の羊飼いのほとんどが3年間の短期査証で入国していたためである。また滞在期間に関しては、それぞれのサンプルの体験談を詳細に読むと、途中でいったん帰国して結婚の後に再渡米するといった行動もみられ、場合によってはアメリカ合衆国とバスク地方の間を複数回往復しているケースもある。いずれの場合も彼らは、バスクに一時帰還していた期間をアメリカ合衆国での「滞在期間」に含めて申告している。滞在期間はサンプルによる差が大きい、それに何が影響しているかは、理由は判然としない。在住集落や出国時期により滞在期間が影響されるという傾向もなく、滞在期間の長短は個人的事情によるものであろう。

Urdanpilleta ら（2008）のデータベースからは、兄弟関係もわかるため、明らかに兄弟と判読できるケースは図5に関係線を示してある。バスク人の姓は父方の姓と母方の姓によ

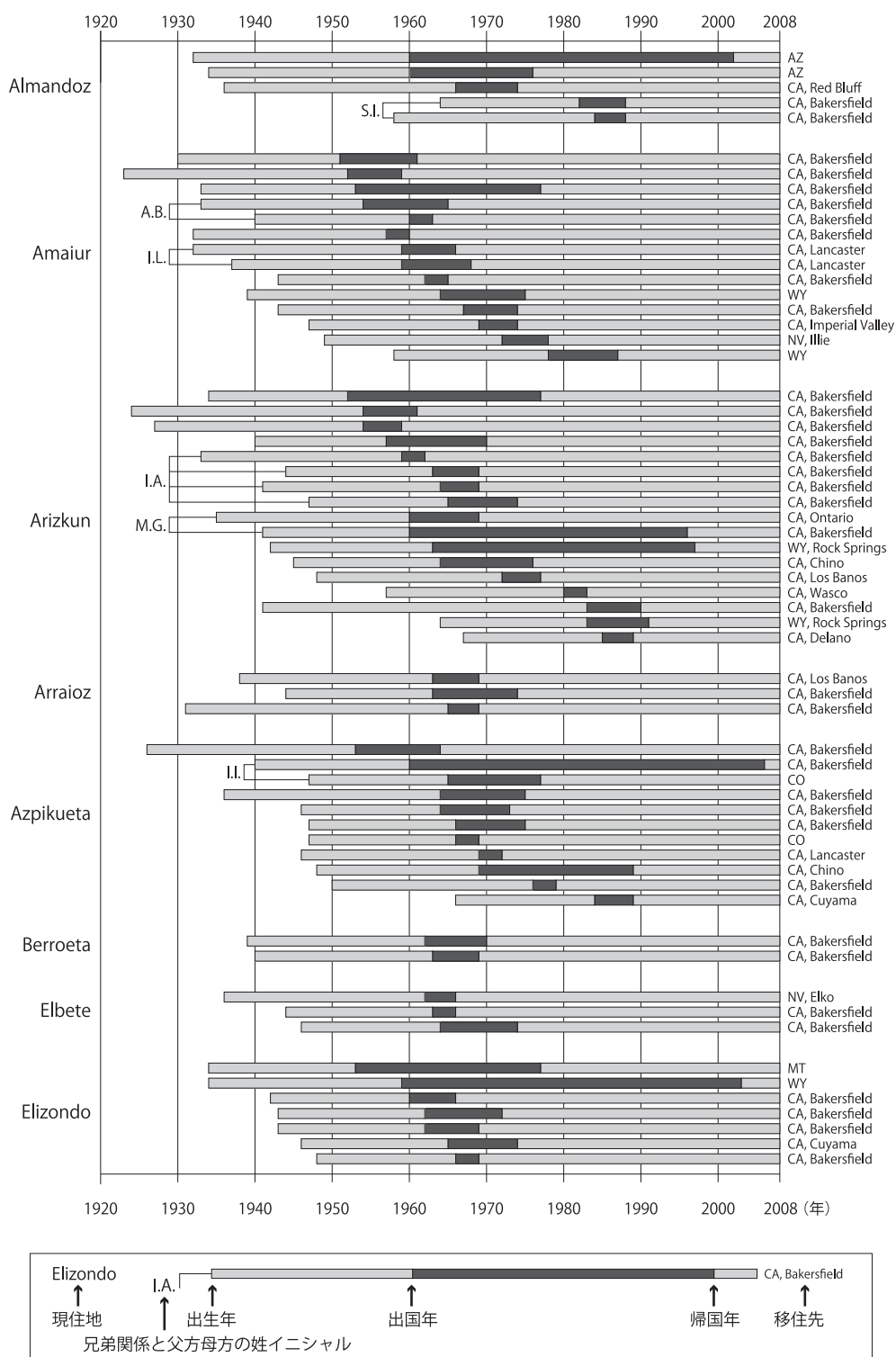


図 5-1 バスタン郡出身の羊飼いの移住行動

出典：Urdanpilleta ら (2008) 所蔵のデータベースを再集計して作成。

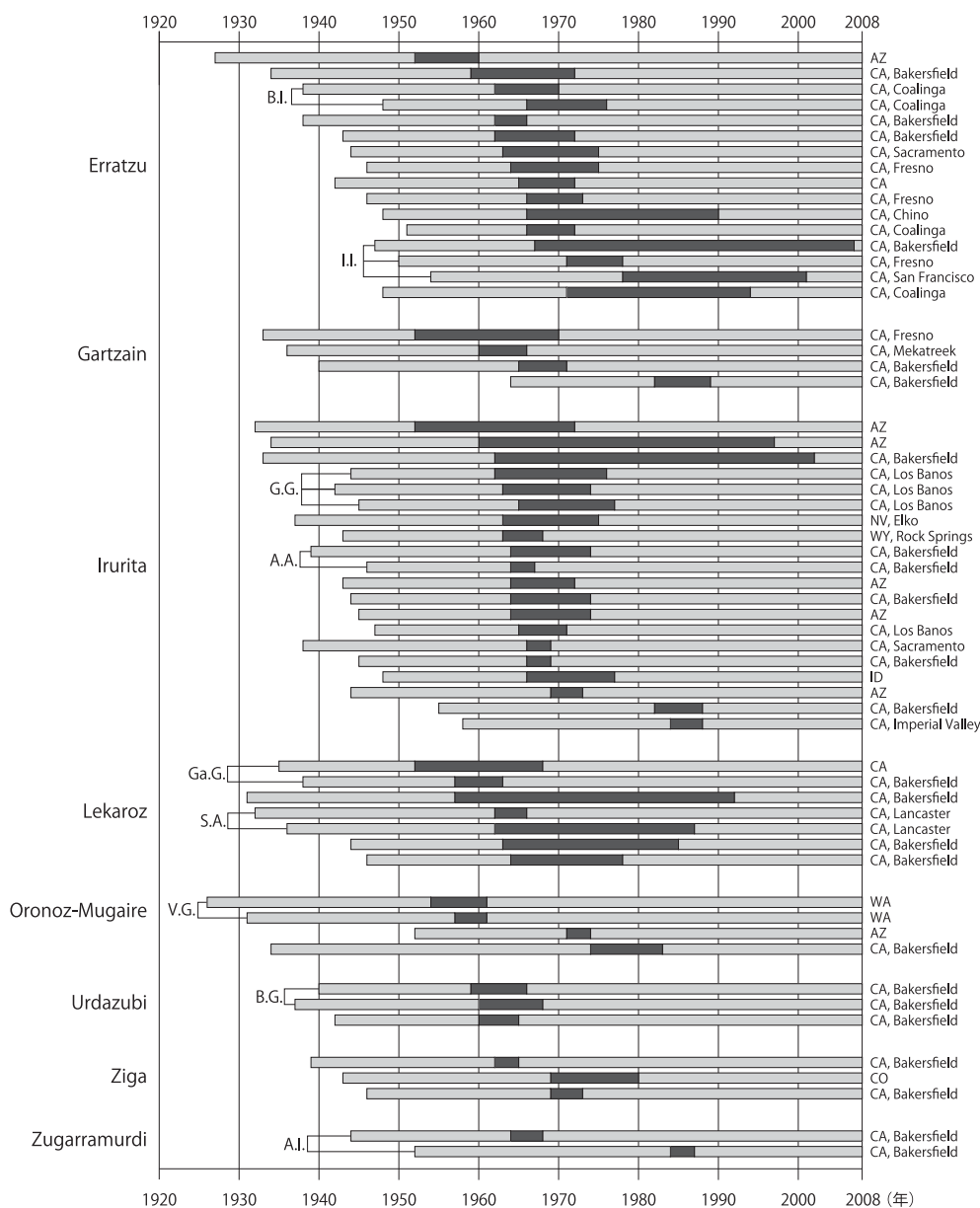


図 5-2 バスタン郡出身の羊飼いの移住行動 (つづき)

出典：図 5-1 に同じ。

り構成されるが、姓の種類が豊富なため、同じ集落内で父方と母方の姓が同じ者は兄弟関係にあると判断して問題ない⁽¹¹⁾。兄弟で移住した羊飼いは 15 組、121 サンプル中 34 名であり、全体の 28.1% を占める。この数値は、血縁関係が移住の重要な要因になっていたことを裏付ける。兄弟の移住パターンの特徴は、滞在期間の一部が重複することにある。滞在期間が全く重複しないのはスガラムルディ村出身の A. I. 兄弟 1 組のみで、それ以外の 14 組の兄弟は、同時期あるいは若干時期をずらして出国しており、さらにアメリカ合衆国内での滞在時期に

重複がみられる。出国時期がずれているが滞在期間の一部が重複するケースは、先に出発した者が兄弟を呼び寄せるという、血縁関係に基づく連鎖移民の典型的移住パターンといえる。

兄弟の連鎖移民のもうひとつの特徴として、移住先が同じ場所である点があげられる。15組で移住先が異なるのは、エラツ村 Erratzu の I.I. 兄弟、アリスクン村 Arizkun の M.G. 兄弟のみで、残りの 13 組の移住先は兄弟間で共通している。これも、血縁者の移住先に連鎖的に移住するという連鎖移民の特徴的なパターンである。

以上のような血縁関係に基づく連鎖移民の特徴が観察されるが、バスタンからの移民の最大の特徴は、移民全体の移住先が特定地域に集中する点にある。バスタンの羊飼いの移住先は、アメリカ合衆国西部諸州に限定されるが、中でもカリフォルニア州に 96 名、全体の 79.3% が集中している (図 6)。移住先についての彼らの回答行動からも、彼らにとってのカリフォルニア州の特異な地位を読み取ることができる。それぞれのサンプルが具体的に回答した移住先を図 5 の右端にそのまま忠実に記載している。彼らは移住先として州名のみを回答する場合もあり、州の中の都市をあげる場合もある。彼らはそれらの州、郡、都市を起点に移牧に従事するのであるが、彼ら自身あるいは彼らの間で当地の地理を詳しく認識する必要のない場合、回答移住先は地理的に漠然とした範囲、つまり州になる。それに対して彼らが地理を詳しく識別する必要のある場合、例えば同郷あるいは近親の同業者が近隣で活動しているような場合は、彼らの地理的認識も詳細になる。カリフォルニア州の場合、バスタン出身の羊飼いが多数入植し、各地を活動拠点としていたため、回答時に「カリフォルニ

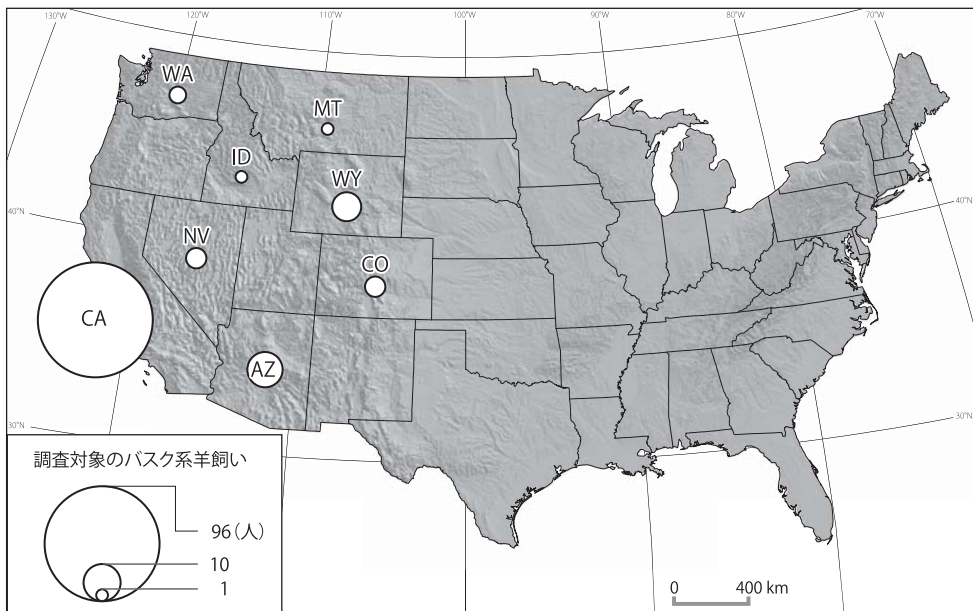


図 6 アメリカ合衆国におけるバスタン郡出身の羊飼いの州別移住先

*ローマ字は州の略号。

出典：Urdanpilleta ら (2008) 所蔵のデータベースを再集計して作成。

ア州」と答えたのはわずか2名であり、残りの94名は具体的都市名をあげている。その中でも注目すべきは、ベーカースフィールド Bakersfield の突出である（図7）。移住先としてベーカースフィールドと回答した者は60名で、2位のロスバノス Los Banos の6名の10倍にあたり、全体に占める割合も49.6%に達する⁽¹²⁾。バスタン出身羊飼いの約半数がベーカースフィールドで活動していたことになる。

バスタン出身の移民が特定地域に集中する傾向は、決してアメリカ合衆国西部だけの現象ではない。Otondo y Dufurena and Legarraga Raddatz (1999) はチリ在住のバスタン出身者185名にインタビュー調査を実施し、そのうち110名（全体の59.5%）が首都サンチャゴに集中していることを明らかにしている。サンチャゴが国家人口の約4分の1を要することを考慮しても、集中傾向にあるのは明らかである⁽¹³⁾。ただし、ベーカースフィールドの場合、サンティアゴのように人口集中地域であるわけではなく、雇用機会も限定されるカリフォルニアの一地方都市であることを鑑みれば、ベーカースフィールドへの集中には特殊な地縁・血縁の存在を推測できる。

以上のように、遠く離れた2つの場所、バスク地方のバスタンとカリフォルニア州のベーカースフィールドが、バスク系移民により連動している実態が明らかになってきた。これは

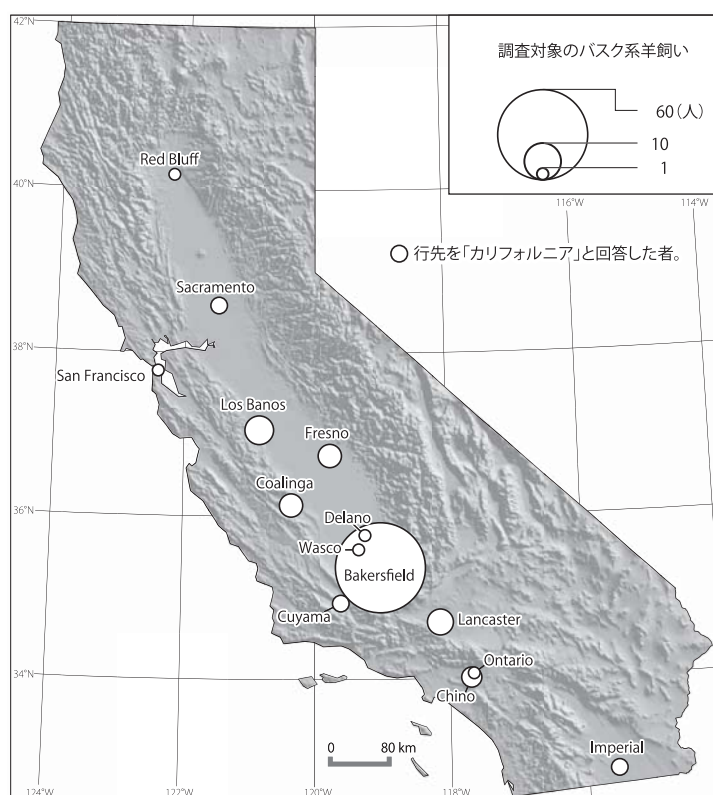


図7 カリフォルニア州におけるバスタン郡出身の羊飼いの具体的移住先

出典：Urdanpilleta ら（2008）所蔵のデータベースを再集計して作成。

バスタン出身の羊飼いの地縁や血縁に基づいた移住行動によるものであるが、ここまでの情報では連鎖移民がどうして生じるのかということを説明するには十分ではない。そもそもバスタンからの連鎖移民はどのようにして始まり、どのように継続したのだろうか。

5. バスク系羊飼いによる場所のリンク：

バスタンからベーカースフィールドへ

ベーカースフィールドは、カリフォルニア州中南部、カーン郡の郡庁所在都市である。セントラルバレーの南部、ちょうどサンホアキンバレーの南端付近に位置する。セントラルバレーを中心とした移牧がバスク系移民により確立された19世紀後半、サンホアキンバレーは冬から春にかけての子羊の出産時期に羊群が滞留する場所であった。ここにバスク系羊飼いが移住する過程に言及した資料は少ないが、Paquette (1982) の *The Basques to Bakersfield* と、Bass and Ansolabehere (2012) の *The Basques to Kern County* は貴重な先行研究である。

Paquette (1982) は、ベーカースフィールドへのバスク系入植者の個人史を検証することで、彼らの入植過程を詳細に明らかにしている。そのなかでバスタンの地名が登場するのはわずかに1か所のみで、その記述も「1890年代後半までにサンホアキンバレー南部を本拠とするスペインバスク人が登場しているが、これらはフランス国境に近いバスタン河谷出身者であった」という漠然とし内容である (Paquette 1982, 33)。しかし、前後の文脈を詳細に解読すれば、バスタンとベーカースフィールドとの関係を明らかにすることは可能である。

ベーカースフィールドを中心とするカーン郡において、移民初期の段階で牧羊ビジネスに最も大きな影響を与えたバスク人は Domingo Oyharzabal であった (Paquette 1982, 33)。彼はバスタンに近いフランスバスクのアスパレン村 Hasparren (図3参照) の出身で、1867年にカリフォルニアに移住し、後に到着した兄弟らとともにサントクララ郡で牧羊ビジネスに参入している。彼らは1870年代半ばにカーン郡へ移動し、1878年にはスペインバスクのマヤ村 Maya 出身の Juan Salaberri と事業を始めている。マヤ村とは、バスタン内のアマイウル村 Amaiur の旧村名であり、ここがバスタンについて Paquette (1982) が最初に言及する個所である。その後もバスタンに関連する言及はいくつか登場する。ベーカースフィールドのビジネスマンであった Pablo Galtes (スペイン東部のカタルーニャ出身) は、先妻の死去後、フランスバスクのアリュドゥード村 Alududes 出身の Marianne Laxague と再婚している。アリュドゥード村はバスタンと国境で接している (図3・4)。結婚と同時に彼女の複数の姪 (同じくアリュドゥード村出身) がベーカースフィールドに移住しているが、その姪の一人に Louise Inda がおり、彼女はスペインのサンタンデル出身の Faustino Noriega (以下、ノリエガ) と1893年に結婚している。

ノリエガはバスク系ではないものの、バスク系移民のカーン郡への大量移住の誘因者となっ

た重要人物であると Paquette (1982, 5) は指摘している。彼のほかにも、1890 年にアリョード村からベーカーズフィールドに移住し牧羊ビジネスに参入した Fernando Etcheverry (以下、エチェベリー) も重要人物である。ノリエガとエチェベリーは 1893 年にベーカーズフィールドで最初の「バスクホテル」といわれるイベリアホテル Hotel Iberia を開業している。エチェベリーは 1906 年に牧場経営に専念するためホテルの全権をノリエガに譲渡したため、このホテルは後に「ノリエガホテル Noriega Hotel」と呼ばれるようになる。ところで「バスクホテル」とは、バスク系移民を対象に宿泊と食事のサービスを提供する一種の下宿屋の通称である。長距離移牧の過程でサンホアキンバレーに冬季に到着する羊飼いは、子羊出産期に一時的に移牧の作業から解放されるが、若く単身の彼らが一時的に身を寄せるのがバスクホテルであった。バス・トイレなどは共用のため宿泊費は安く、バスクレストランが併設されているため故郷の食事を堪能することができる。ホテル従業員のメイドらもバスク地方からの移民であるため英語を使用する必要もなかった。そのためバスク地方から初めて到着した移民の一時避難所かつ活動起点のような役割も果たした。このようなバスクホテルはバスク系移民が集中するアメリカ合衆国西部各地に作られた。ベーカーズフィールドにはサンホアキンバレー南部を代表するバスクホテルであるノリエガホテルが存在するうえ、ノリエガは 1901 年に新たなバスクホテルであるピレネーホテル Pyrenees Hotel をここで開業しており、1906 年にはノリエガホテルから独立した Burubeltz 一族がホテルデューロップ Hotel d'Europe を同市に開業している (Bass and Ansolabehere 2011)。同市には 1920 年頃までにさらに複数のバスクホテルが開業しており、これらバスクホテルは、この地域一帯のバスク系移民の社会活動のハブとして機能したことはいうまでもなく、新たに到着する移民のレセプターとしても機能した。

バスクホテルが羊飼いか求人場としても機能したとの指摘もある。そもそも 1900 年代前半まで、バスク系羊飼いは地縁や血縁などの個人的つながりをたよりに確保されてきた。しかし 1900 年代後半に入ると、バスク系羊飼いの供給過剰が目立つようになり、雇用から漏れた羊飼いはバスクホテルに集積するようになった。こうした状況下では、雇用者である牧羊業者はバスクホテルに出向いて求職者を募れば容易に労働力を確保することが可能であり、求職者の立場からすればバスクホテルにおいて求人を待つことが雇用への近道となった。こうして 1920 年代ごろまでには、需要と供給のバランスに基づく羊飼いの補充システムがバスクホテルを舞台に機能するようになった (Douglass and Bilbao 1975, 300-1)。ただし、これにより地縁や血縁に基づく移民の補充が途絶えたわけではない。なぜなら、当時の羊飼いかルートの窓口はバスクホテルのオーナーであったからである。オーナーは、通訳でもあり、郵便局や医師の代行でもあり、ビジネスコンサルタントでもあった (Bass and Ansolabehere 2011, 1-2)。ノリエガホテルのオーナーであるノリエガとエチェベリーをはじめ、バスクホテルのバスク系オーナーらが移民受け入れ窓口としての役割を果たしたこと、彼らと地縁や血縁の深いバスタンとその近隣の村々からの連鎖移民が継続したのである。

Paquette (1982) は、スペインバスク系移民に言及した章で、1920年代までにベーカーズフィールドに入植した重要人物7名の個人史を紹介しているが、そのうちバスタン出身者は4名にのぼる。マヤ村出身でエチェベリー家の息女と結婚した Tomas Echenique, 同じくマヤ村出身で Tomas Echenique をたよりに移住し Miller and Lux 社から牧羊場の一部を購入した Clemente Galainena, エリソンド村出身で後にメンディブル牧羊社を設立する Gregorio Mendiburu, シガ村 Ziga 出身でノリエガホテルや Tomas Echenique の下で就労した Tomas Inda である。これら4名は地縁や血縁を頼りにベーカーズフィールドに移住し、さらなる連鎖移民を誘引する牧羊業を展開している。また彼らがノリエガ家やエチェベリー家と関係することも興味深い。彼ら以外にも、今回分析に利用したデータベースに収められた具体的体験談には、「ノリエガに従事するため」あるいは「エチェベリーに従事するため」といった記述が散見される。ノリエガ一族はホテル業を広く営むと同時に、ノリエガ牧羊社 Noriega Sheep Company を営業していた⁽¹⁴⁾。エチェベリーはホテルの営業権をノリエガに譲渡して後は牧羊業を幅広く展開し、現在まで続くエチェベリー牧羊社 Etcheverry Sheep Company を起業した。彼らの事業はバスク系移民の就労先となり、連鎖移民を強化したのである。

ただし、本論で扱ったバスタン出身の羊飼いが入国している1950年代以降は、移民の入国環境は20世紀初めに比べ大きく変化している。特に需給関係と法的環境の変化が大きい。1924年移民法による移民国別制限割当てにより、スペインバスク地方からの羊飼いの供給は滞りようになった。さらに第二次大戦期は徴兵や羊毛需要増加により、羊飼いの不足が深刻化した。それに対して、一連の「羊飼い法」により不法滞在バスク系羊飼いの市民権を合法化したり、1952年には移民国籍法、通称マッカラン＝ウォルター法により熟練羊飼いを特殊技能者に指定し移民割当てから除外するといった法的措置を講じたりすることで、羊飼いの労働力が確保された。パトリック・マッカラン上院議員 Patrick Anthony McCarran は1952年移民国籍法に先立ち、1950年に羊飼いの250人の入国を許可する国会法587号、1952年にはさらに500人を追加する国会法307号の成立に尽力しており、移民国籍法成立後もスペインバスクからの入国割当てに有利な上院法案を多数提出している (Douglass and Bilbao 1975, 309-13)。マッカラン上院議員はネヴァダ州出身であり、カリフォルニア山系組合やカリフォルニア羊毛組合などアメリカ合衆国西部を代表する牧羊関連団体は彼の重要な支持団体であった。これら支持団体の構成員の核がバスク系牧羊業者であったことを考えれば、彼の議会活動の背景には羊飼いの不足に悩むエチェベリー牧羊社やノリエガ牧羊社などのベーカーズフィールドのバスク系牧羊業者が存在したことは容易に想像できる。

バスク系羊飼いの確保のための法整備は、同時にバスク系羊飼いをリクルートするための新制度の構築を促した。1952年の国会法307号は、団体が羊飼いの保証人となることを認めた。その役割を担ったのが、前述のカリフォルニア山系組合である。カリフォルニア山系組合は、1949年に羊飼いの補充を目的に設立された団体であり、国会法307号成立後は海外

から羊飼いをリクルートする権限を全国羊毛生産者組合 National Woolgrowers Association と西部各州の羊毛生産者組合から与えられた (Douglass and Bilbao 1975, 311)。カリフォルニア山系組合の発足時の会長や役員は、カリフォルニアの主要な牧羊業者であったが、牧羊業者の多くをバスク人が占めていたため、これら要職はすべてバスク人で独占されていた (Douglass and Bilbao 1975, 311)。

カリフォルニア山系組合は、羊飼いをリクルートの海外窓口をアメリカ合衆国領事館が当時所在したスペインバスクのビルバオ Bilbao (図 3 参照) に置いた。同組合はそこを窓口スペイン政府と交渉し、さらにアメリカ合衆国内ではカリフォルニアのフレズノにある本部を拠点にアメリカ移民局、各州の雇用担当局と交渉し、バスク系羊飼いの移住を調整した。この体制は、同組合が 1960 年に全国団体の西部山系組合 Western Range Association に改組されて以降も継承された。

1950 年代に入国したバスク系移民の場合、前述のように短期査証による移住であったため、滞在期間は 3 年に限定された。彼らは羊飼いの経験を積んだ後に滞在期限を迎えるのであるが、ちょうどそれがピークを迎えた 1950 年代末、牧羊業者らが入国管理局に滞在延長の圧力をかけるようになり、1960 年代初めには引き続く 3 年間の滞在が、1960 年代半ばには 3 期目の滞在が認められるようになった (Douglass and Bilbao 1975, 317)。そのような経緯に則すならば、1950 年代初期に入国した羊飼いの滞在期間は 3 年に近く、1960 年代以降に入国した者ほど長期滞在が可能になるはずであるが、図 5 からはそのような傾向は読み取れない。法的制度を逸脱した滞在が流布していたのかもしれない。

以上のように、羊飼いや雇用のための新制度が 1950 年代から 1960 年代にかけて完成し、それによってリクルートされたバスク系羊飼いはアメリカ合衆国西部において従事した。その雇用窓口はカリフォルニア山系組合であり、その公益性をかんがみれば羊飼いの出身地や入植先が特定地域に偏ることは考えられないが、実際には組合の構成員は個々の牧羊業者であり、業者はそれぞれの地縁・血縁的背景を重視して羊飼いをリクルートした。その結果、個人関係に直接依存しない制度的移住に移行した 1950 年代以降も、地縁・血縁に基づく連鎖移民が継承されたのである。

6. おわりに

19 世紀後半以降にアメリカ合衆国西部に入国したバスク系移民の先人たちは、地縁や血縁に依拠した移民経路を構築した。先人たちは、ビジネスにおいて地縁や血縁を重視し、緊密なバスク系共同体を構築した。さらに先人たちは地縁血縁を超えた範囲まで人脈を拡張し、その人脈は先人の地縁者・血縁者が連鎖的に移住するのに適した制度体系を彼らに提供した。1950 年代以降に入国したバスク系羊飼いや、その制度を頼りに移住した。バスク地方のバスタンからカリフォルニア州のペーカーズフィールドへのバスク系羊飼いの移住は、19 世

紀末から1960年代まで形を変えながらも存続した連鎖移民ネットワークにより維持されたのである。

連鎖移民は1970年代半ばにはほぼ終焉している。その終焉はバスク地方本国の経済環境の好転によるもので、受入地であるアメリカ合衆国側の諸環境の変化ではない。こうして連鎖移民は過去のものとなったが、19世紀半ば以降に構築されたバスタンとベーカーズフィールドを結ぶ場所の連帯は現在も存在している。ベーカーズフィールドでは、カリフォルニア州カーン郡バスク協会主催のバスクフェスティバルが毎年開催されている。ヨーロッパのバスク地方では、「アメリカのバスク系羊飼いの協会 Euskal Artzainak Ameriketako」が、かつてアメリカ合衆国で従事した羊飼いを組織化する運動を進めており、2008年にバスタンで集会を開催したことは前述のとおりである。さらに同協会は、かつてアメリカ合衆国で羊飼いに従事したバスク在住者84名をとめない、2013年9月にベーカーズフィールドをはじめとするカリフォルニア州の諸都市の訪問を実現している。参加した84名は、現在では羊飼いを退いた高齢者であり、その多くはバスタンを中心とするナバラ州北部の出身者であった。ベーカーズフィールドを巡るバスク系羊飼いの記憶を巡る今回の旅は、カリフォルニア州のバスク系社会と故郷バスク地方で大々的に報道された。こうした報道は、バスク地方とアメリカ合衆国西部をリンクする物語として、大西洋を隔てた2つのバスク人共同体により共有され、両共同体の連帯を強化する。

こうして大西洋を隔てて再生産されたバスク移民の場所は、Steingart (2004) のいう「記憶の場所 gedenkstätte」のような記念碑的存在なのだろうか。カリフォルニアのバスク共同体は、人の移動こそ絶えたものの、2つの地理をつなぐ物語により現在もなお連動している。さらにこの物語に触発された現代のバスク人は、2つの場所の地理的リンクをさらに強固なものとして語り継ぐために努力している。その作業を世代と空間を超えて続けているのが「アメリカのバスク系羊飼いの協会 Euskal Artzainak Ameriketako」であり、アメリカ合衆国内に多数存在するバスク協会をはじめとする同人会組織である。大西洋を隔てて再生産されたベーカーズフィールドにおけるバスタンは、記念碑として過去を顧みながらいつくしむものというよりも、現在進行形で脈々と息づくバスク共同体の空間的表象そのものといえよう。

*本稿の執筆に際しては、平成25年度科学研究費補助金基盤研究(A) (研究代表者：矢ヶ崎典隆、課題番号：23251002) と、平成25年度科学研究費補助金基盤研究(C) (研究代表者：石井久生、課題番号：24520898) の一部を使用した。現地調査に際して、Euskal Artzainak Ameriketako 協会の会長 Laura Igantzi 氏と書記長 Xanti Alzuguren 氏には、本論の骨子となる貴重なデータをご提供いただくと同時に、バスク系羊飼いに関する貴重なコメントをいただいた。バスク大学の Rosa Maria Arburua Goyeneche 氏にはアメリカ合衆国でかつて羊飼いに従事した経験者を多数紹介いただき、インタビュー実現のためにご尽力いただいた。同様にナバラ政府や自治体の関係者には現地調査の便宜をはかっていただいた。ここに記して御礼申し上げます。

〈注〉

- (1) Chan (2000, 62) が 1849 年から 1850 年にかけての乗客名簿にバスク人が多数含まれていると指摘していることから、ゴールドラッシュの初期段階ですでに多数のバスク人がカリフォルニアに入植していた実態がうかがえる。
- (2) 1980 年と 1990 年センサスには、出自「バスク」の下位項目に「スペイン」と「フランス」があり、フランス系バスクとスペイン系バスクを統計として把握することが可能であったが、多くは 2 つの下位項目を選択せず、単に「バスク」と回答しているため、いずれの系統かを把握することも難しい。この 2 つの下位項目は 2000 年センサス以降省略されている。
- (3) 図 3 中に示した Iparralde は、バスク語で「北部地方」を意味し、「フランスバスク地方」を指す場合に用いる。別の呼び方に Ipar Euskal Herria「北のバスク地方」もある。フランス語では Pays basque であるが、これは単に「バスク地方」の意味なので、今回は Iparralde を用いた。
- (4) 1921 年移民法は、1910 年センサスの出身国別人口比率をもとに移民割当てを算出していたが、俗にジョンソン＝リード法と呼ばれる 1924 年移民法は、南欧や東欧からの移民がまだ少なかった 1890 年に実施されたセンサスの出身国別人口比率をもとに移民割当てを適用したため、南欧に分類されるスペインには厳しい割当てが課され、結果的にスペインバスクからの移民は急減した。「帰化不能外国人の移民全面禁止」を定める第 13 条 C 項が盛り込まれ、日系移民がそれに分類されたため、同法は日本では「排日移民法」の名で知られている。
- (5) Douglass and Bilbao (1975, 319-20) によれば、1957 年から 1970 年 6 月までの間に、この規定により入国した羊飼いは 5495 人に達する。520 人のランダムサンプル調査では、ビスカヤ人 227、ナバラ人 177、フランスバスク人 4、ギブスコア人 16、アラバ人 1、バスク人以外が 89 で、マッカラ＝ウォルター法がバスク系のみを対象としていなかったにもかかわらず、その恩恵を受けた羊飼いの大多数はバスク人であった。
- (6) 直訳すれば、「アメリカにおけるバスク系羊飼い」、英語では Basque shepherders in America になる。
- (7) この資料は発行部数が少なかったうえに市販されなかったこともあり、現在では入手困難となっているが、協会関係者の協力により今回入手することができた。
- (8) ナバラ州における基礎自治体の平均面積は 37.0 km² で、面積第 2 位の Valle de Yerri/Deierri でも 252.6 km² である。
- (9) ナバラ州を含むスペインの行政上の最も基礎的な自治体はムニシピオ municipio であるが、ナバラ州では、ひとつの基礎自治体が複数の大きな集落で構成される場合、集落に代議機関 CONSEJO Consejo を置き、集落の行政上の問題処理にあたらせる。ナバラ州には 2013 年現在 348 の CONSEJO が存在する。CONSEJO は、ナバラ州北部と中部に多い。南部の基礎自治体は通常ひとつの集落で構成されるためである。
- (10) バスク語研究の古典として有名な Louis Lucien Bonaparte の分類 (1869) の中にもバスタン方言が登場する。
- (11) Euskal Artzainak Ameriketan 協会の書記長 Xanti Alzuguren 氏によれば、父方あるいは母方の一方の姓が一致するケースは姻戚関係にある場合がほとんどである、とのことであったが、完全に確証できないので、今回そこまで解釈範囲を拡大しなかった。
- (12) 彼らはロスバナスをスペインやメキシコによる統治時代のスペイン語旧地名ロスバーニョス Los Baños として回答している。
- (13) Otondo y Dufurena and Legarraga Raddatz (1999) はほかにも興味深い結果を提示している。例えば地縁であるが、チリ在住のバスタン出身者で婚姻相手として同じくバスタン人を選択しているケースが 79、全体の 42.7% に達する。他のバスク人を選択しているケースが 29、15.6 % であるから、地縁重視傾向が顕著である。さらに興味深いのが就業分野で、農業が 4 ケース

(3.0%)なのに対し、パン関連産業が102ケース、チリ在住のバスタン人の76.0%にも達する。これは、バスタン出身者が首都のサンティアゴに集中しており羊飼いのような農業部門への参入が困難であったこと、おそらくかつては羊飼いで従業者も存在したであろうが1990年代のインタビュー実施時には斜陽産業の牧羊業からすでに離職してパン製造業に参入していた、などの理由が考えられる。しかしいずれも確証できないので、今後の検証課題である。そうではあるが、バスタン出身の移民が特定産業に集中的に参入する現象は、大変興味深い。

- (14) ノリエガ牧羊社についての記述は極めて限られるが、Paquette (1982, 82)によれば1930年代には営業していたようである。

参考文献

- Álvarez Gila, Ó. (2002): “Los vascos de Buenos Aires a la luz del censo de 1855.” In Ó. Álvarez Gila and A. Angulo Morales (eds.), *Las migraciones vascas en perspectiva histórica (siglo XVI-XX)*. Bilbao: Euskal Herriko Unibertsitateko Argitalpen Zerbitzua, pp. 139-178.
- Arburua Goienetxe, R. (2005): *1940-1960 bortzirietako gaztiak*. Irun: Alberdania.
- Arizcun Cela, A. (1988), *Economía y sociedad en un valle pirenaico del Antiguo Régimen: Baztán, 1600-1841*. Pamplona: Gobierno de Navarra.
- Azcona Pastor, J. and W. A. Douglass (2004): *Possible Paradises: Basque Emigration to Latin America*. Reno: Univ. of Nevada Press.
- Bass, S. and G. Ansolabehere (2011): “Kern Country Basque Owned or Operated Hotels and Boarding Houses.” *Quarterly Bulletin Historic Kern*, Kern County Historical Society, 61 (1), pp. 1-7.
- Bass, S. and G. Ansolabehere (2012): *The Basques of Kern County*. Bakersfield: Kern County Basque Club.
- Bieter, J. and M. Bieter (2000): *An Enduring Legacy: The Story of Basques in Idaho*. Reno: The Univ. of Nevada Press.
- Bieter, J. (2005): *Un legado que perdura: La historia de los vascos en Idaho*. Vitoria-Gasteiz: Eusko Jaurlaritzaren Argitalpen Zerbitzu Nagusia.
- Chan, S. (2000): “A People of Exceptional Character: Ethnic Diversity, Nativism, and Racism in the California Gold Rush.” In K. Starr and R. J. Orsi (eds.), *Rooted in Barbarous Soil: People, Culture, and Community in Gold Rush California*. Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, pp. 1-24.
- Douglass, W. A. (1979): “Basque Immigrants: Constrasting Patterns of Adaptation in Argentina and the American West.” In S. Tax and R. E. Hinshaw (eds.), *Currents in Anthropology: Essays in Honor of Sol Tax*. New York: Mouton, pp. 287-303.
- Douglass, W. A. (1984): “Sheep Ranchers and Sugar Growers: Property Transmission in the Basque Immigrant Family of the American West and Australia.” In R. M. Netting, R. R. Wilk, and E. J. Arnould (eds.): *Households: Comparative and Historical Studies of the Domestic Group*. Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, pp. 109-129.
- Douglass, W. A. (2003): *La vasconia global: Ensayos sobre las diásporas vascas*. Vitoria-Gasteiz: Eusko Jaurlaritzaren Argitalpen Zerbitzu Nagusia.
- Douglass, W. A. and J. Bilbao (1975): *Amerikanuak: Basques in the New World*. Reno: Univ. of Nevada Press.
- Ezeizabarrena Sáenz, Xabier (2009): “Las ordenanzas del Valle de Baztán: Breve nota jurídica e histórica.” *Vasconia*, 36: 283-290.
- Idoate Ezquieta, C. (1989): *Emigración Navarra del Valle de Baztán a América durante el siglo*

- XIX: *Inventario de documentos*. Pamplona: Institución Príncipe de Viana.
- Laparra, M., Á. García, and S. Anaut Bravo (2009): “Las migraciones de los navarros: Una aproximación cuantitativa.” In M. Laparra and S. Anaut Bravo (eds.), *Estudio sobre la evolución y situación actual en el mundo de la población emigrante de Navarra*. Pamplona: ALTER Grupo de investigación, Departamento de Trabajo Social, Universidad Pública de Navarra, pp. 55–91.
- Miller, E. A. (2013): “Basques and Basque American, 1870–1940.” In E. R. Barkan (ed.), *Immigrants in American History: Arrival, Adaptation, and Integration*. Santa Barbara, California: ABC-CLIO, pp. 219–227.
- Oiarzabal, P. J. (2009): *Gardeners of Identity: Basques in the San Francisco Bay Area*. Reno: Center for BasqueStudies, Univ. of Nevada.
- Otondo y Dufurena, A. and P. Legarraga Raddatz (1999): *Emigración a Chile del Valle de Baztán en el siglo XX*. Pamplona: Gobierno de Navarra.
- Paquette, M. G. (1982): *Basques to Bakersfield*. Bakersfield: Kern County Historical Society.
- Steingart, A. (2004): *Schauplätze Berliner geschichte*. Berlin: Auflage. 谷口健治・南直人・北村昌史・進藤修一・為政雅代訳『ベルリン——〈記憶の場所〉を辿る旅』昭和堂.
- Thursby, J. S. (2009): “Contemporary Basque Shepherds of the American West: In Harmony with Animals and Nature.” In Cutchins, D. and E. A. Eliason (eds.), *Wild Games: Hunting and Fishing Traditions in North America*. Knoxville: The Univ. of Tennessee Press, pp. 163–180.
- Urdanpilleta, G., J. Etchevery, L. Yanci, J. Goldaraz, and L. Igantzi, N. Yanci (2008): *Ameriketaratgana, artzaindoike!: Bastan, Urdazubi eta Zugarramurdiko artzainak ameriketan*. Pamplona: Diario de Noticias and Baztango Udala.
- Weis, R. (2012): *Bakers and Basques: A Social History of Bread in Mexico*. Albuquerque: Univ. of New Mexico Press.
- Yanci, L., G. Urdanpilleta, J. Goldaraz, and L. Santamaria (2006): *Bortzirietako Artzainak Ameriketan*. Lesaka: Lesakako Udala.

Migration Behavior of Basque Sheepherders
between the Basque Country and the American West:
A Case of Sheepherders from Baztan, Navarre

Hisao Ishii

Many Basques migrated from the Basque Country in Europe to the American West, especially to California as miners in the era of the Gold Rush in the middle of the 19th century. As the mining industry declined, they participated gradually in the sheep herding industry. Some pioneers made a success and they recruited sheepherders through their personal relations, mainly through kingship and native community ties. By the end of the 19th century, labor force of sheep herder was nearly dominated by the Basque immigrants, and the sheep herder became to be a stereotype of Basque people occupational style in the American West. The Baztan region of the northern part of Navarre was also a typical sender of emigrants to the USA. From the Baztan and its neighbor regions of the French Basque, many people immigrated to the American West, especially to Bakersfield, in the Kern County of California. At the last decades of the 19th century, some precursors succeeded in the sheep industry and built a basis of the future immigration through personal ties, or the chain migration, from Baztan. Through this channel, a lot of sheep herders came to Bakersfield and its neighboring area from Baztan, and they realized a typical style of transhumance. After the establishment of legal basis of sheep herder importation system in the 1950's, about a half of immigrants from Baztan and neighboring area continued to head for Bakersfield, in order to gain their job through personal connection and geographical ties. When they achieved some savings, most of them went back to the Basque Country. The chain migration from Baztan has continued until the end of the Basque migration phenomenon in the 1970's as a result of the improvement of economic and social condition in the Basque Country. From the beginning of the 21st century, some descendants of sheep herding experiencers in the American West began to organize ex-herders and to record their memories.